文明法則史学概要

１９９８ 年版

（2012.1.補訂）

目　次

１.文明法則史学とは　2～5
1-1.文明法則史学の目的･対象
1-2.文明法則史学のエッセンス
1-2-1.上部構造＝ＣＣ　1-2-2.下部構造＝ＳＳ

２.文明法則史学の研究方法　6～12
2-1.ＳＳの研究法
2-2.ＳＳの認定基準
2-3.ＣＣの研究法
2-4.ＳＳの研究事例（イスラム帝国ＳＳ）
2-4-1.社会的に均質な地域･時代　2-4-2.社会の盛衰
2-4-3.社会のエージング　2-4-4.各指標点の選定
2-5.ＣＣの研究事例（イスラム帝国ＳＳと他の二つのＳＳとの相互比較）

３.文明法則史学の研究状況　13～16
3-1.ＣＣの研究状況
3-2.ＳＳの研究状況
3-2-1.村山節･林英臣による研究･検証　3-2-2.最近の研究

文明法則史学研究所

１．文明法則史学とは

1-1. 文明法則史学の目的･対象

文明法則史学とは、人類の文明史すべてを研究対象とし、古今東西の歴史が示す盛衰パターンの共通性を明らかにしようとする歴史学である。

1-2. 文明法則史学のエッセンス

日本の文明研究家･**村山節**(むらやま･みさお;1911年～)は、目盛間隔を一定にとった世界史年表を作成する過程で、様々な地域･時代の歴史に共通する二層の盛衰パターンを発見した(1937年頃)。文明法則史学はこの村山の発見に始まる。

1-2-1. 上部構造 ＝ ＣＣ

1) **文明史には1600年の盛衰周期が存在する。**(→p. 3, ①)

・文明法則史学ではこの盛衰周期を**ＣＣ**(=Civilization Cycle;**文明サイクル**)と呼び、波形を用いて表現する。

・ＣＣを表す波形は各期の位相を示す目的で描くものであり、ある点の縦座標や線の傾きには物理的な意味は含まれない。

2) **ＣＣの1600年は800年の準備期(低調期)と800年の文明期(高調期)とに大別でき、両者は文明創造力や社会の活力において大きな差をもつ。**(→p. 3, ②)

・文明法則史学では前者を**α期**、後者を**β期**と呼んでいる。

3) **ＣＣは1600年を周期として準備→開花→成熟→崩壊の過程を繰り返し、ＣＣに対する位相と文明現象との間には関連性が認められる。**(→p. 3, ②)
すなわち、文明はあたかも「1600年周期の四季」をもつように振る舞う。

・α期からβ期へと連なる1600年で一つのＣＣをなしている。

・α期前半には武力政権や暗黒社会が現れやすい。

・α期後半には文明準備現象がみられる。(次のβ期の主役を担う民族形成など)

・β期前半頃には芸術･学術の開花(ルネッサンス現象)がみられる。

・β期の中頃には爆発的な対外進出が現れやすい。

・β期後半には該当ＣＣにおいて最高度に発達した文明が出現する。

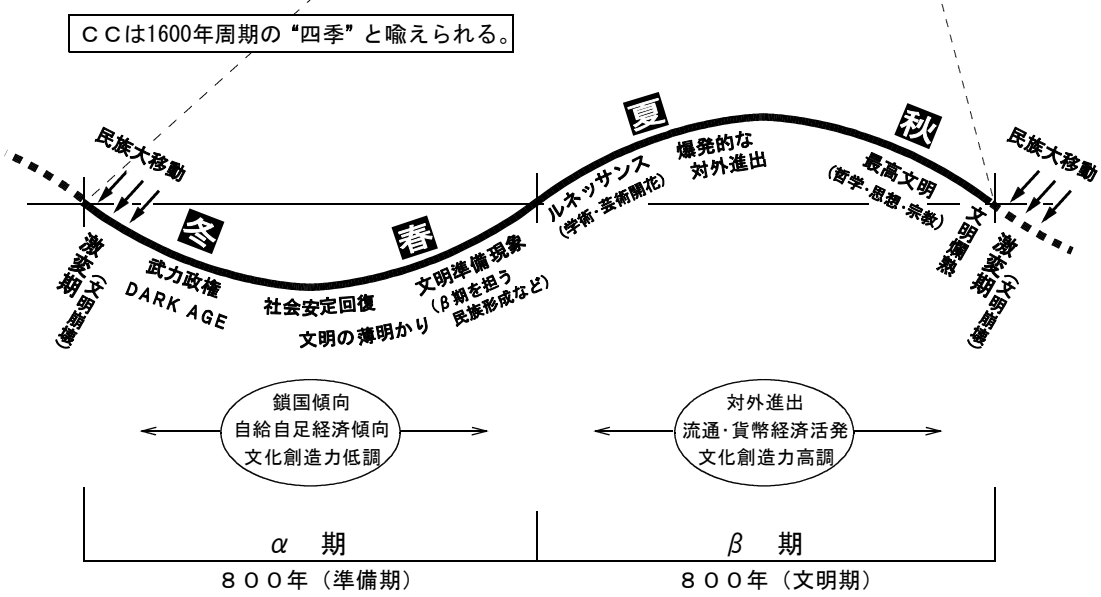
・β期末期から次のα期初頭にかけては文明破壊を伴う民族大移動が現れやすい。

4) **ＣＣは東西二系統に大別される二極構造をもち、両系統は互いに逆位相の関係にある。**(→p. 3, ③)

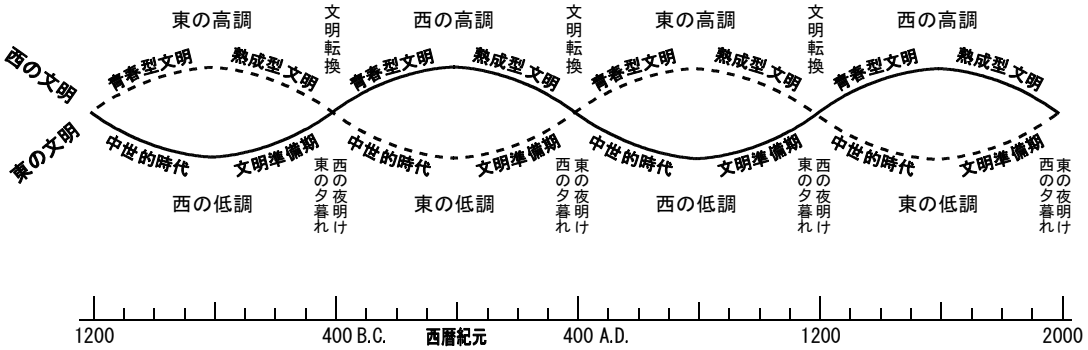
・西の文明には**古代エジプト系統･ヨーロッパ系統**が、東の文明には**西アジア系統**

① 上部構造＝ＣＣ（Civilization Cycle ;文明サイクル）

② ＣＣ各期の共通傾向



③ ＣＣの二極構造



・**インド系統・中国系統・日本系統**などが、それぞれ含まれる。
・東西のＣＣのうち一方がα期からβ期へ移行する時期と他方がβ期からα期へ移行する時期は一致している。文明法則史学ではこの移行期を**文明交代期**と呼んでいる。
・世界史は800年毎に文明交代期を迎えている。

5) 過去の周期性がそのまま再現された場合、21世紀は西の文明が崩壊し、代わって東の文明が夜明けを迎える文明交代期となる。

1-2-2.下部構造 ＝ ＳＳ

1) 文明を創造した地域・時代の歴史の多くに、ＣＣの下部構造として、個人の一生と極めて類似した展開パターンをもつ、平均寿命数世紀の盛衰が認められる。(→p.5,④) **すなわち、この盛衰は社会のagingを反映している。**
（例：欧州の「ローマ時代」,日本の「大化改新～平安末期」など; p.10,⑨参照）

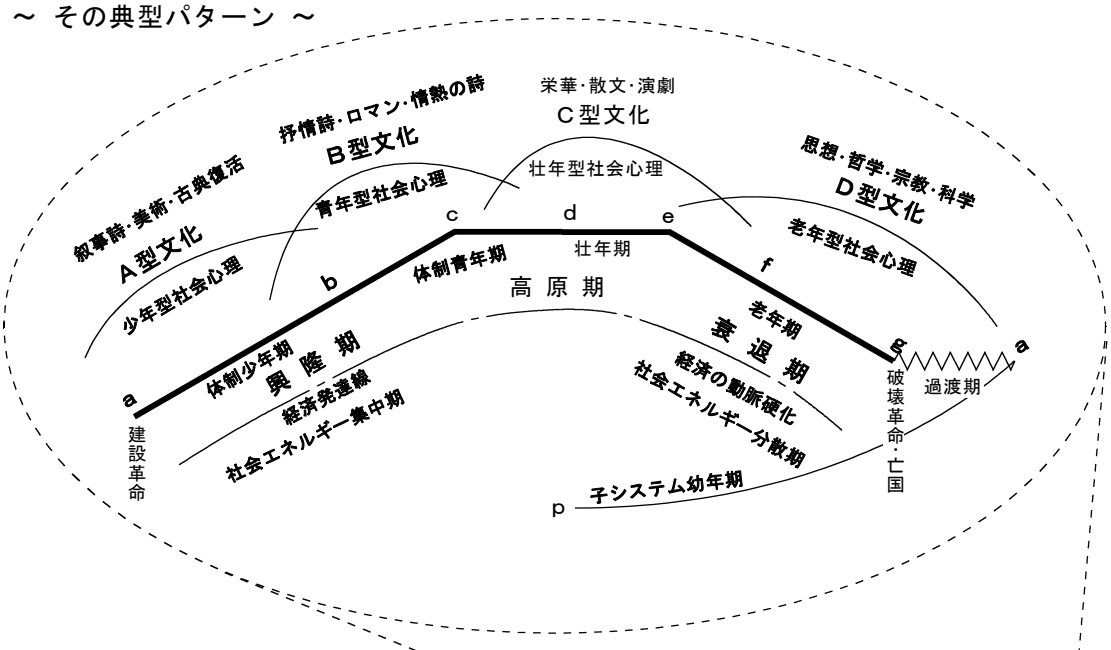
・文明法則史学ではこの下部構造を**ＳＳ(=Social System;社会秩序)**と呼んでいる。
・1つのＣＣには、ＳＳによる小さな盛衰が概ね4回(3～5回)現れる。(**1ＣＣ≒4ＳＳ**)
・あるＳＳの崩壊後、より細かなＳＳが並んで登場する場合もある。(→ヨーロッパ)
・ＳＳの寿命には、地域や時代によってかなりの個性がある。
・ＳＳと次のＳＳの間には、過渡期のある場合が多い。
・文明法則史学では、ＳＳを大きく「興隆期」「高原期」「衰退期」の3つの時期に分けて捉え、それぞれ「右上がり」「水平」「右下がり」の線で表現する。
・ＳＳの三期区分を示す直線の縦座標や傾きには、物理的な意味は含まれない。
・ＳＳの各期を区分するために**指標点(a～g点,p点)**を設ける。(→④,⑥)
・各指標点には、各期を区分するのに最適な歴史的事跡を選定して充てる。
そのため、±5年程度の誤差を含む場合がある。
・各ＳＳで発現した文化のうち、とくに社会心理のagingを反映した文化を次の4つの文化型に分類する(→④)。
Ａ型文化(少年型社会心理):素朴,清新,豪放な心理。叙事詩,美術,古典復活など。
Ｂ型文化(青年型社会心理):情熱,ロマン,恋愛の心理。叙情詩など。
Ｃ型文化(壮年型社会心理):栄華の心理。散文,演劇など。
Ｄ型文化(老年型社会心理):思索の心理。思想・哲学・宗教・科学など。
・Ａ～Ｄ型文化の発現は、ＳＳのagingを示す際に重要な根拠となる。
・ＳＳ興隆期と現世肯定的社会心理、ＳＳ衰退期と現世否定的社会心理が対応する。
・α期のＳＳでは、Ａ～Ｄ型文化の発現が弱い場合が多い。

2) ＣＣにおいてＳＳの占める位置が、そのＳＳの性格に大きな影響を与える。すなわち、ＣＣの特性がＳＳに反映される。(→p.5,⑤)

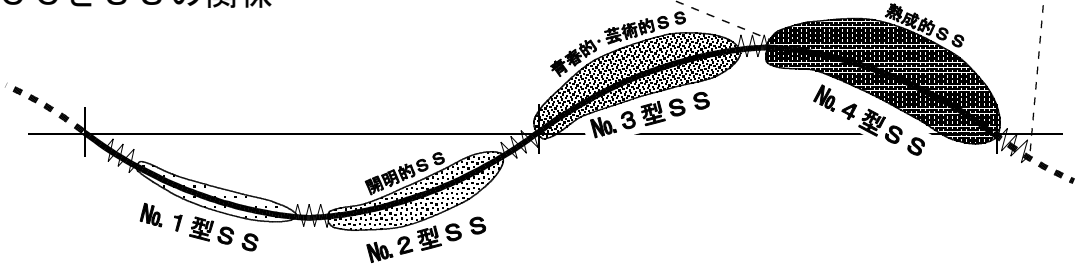
・文明法則史学では、ＳＳをＣＣ上の位置によって次の4つの型に分類している。
すなわち、**No.１型ＳＳ**, **No.２型ＳＳ(開明的ＳＳ)**, **No.３型ＳＳ(青春的・芸術的ＳＳ)**, **No.４型ＳＳ(熟成的ＳＳ)**の4つである。

④ 下部構造＝ＳＳ（Social System；社会秩序）

～ その典型パターン ～



⑤ ＣＣとＳＳの関係



⑥ ＳＳの指標点

ａ点 … ＳＳが誕生･成立し、骨格形成を始める時点。国家統一の求心力確立，建設革命，維新など。
ｂ点 … ＳＳが肉体的大成長期に移行する興隆加速点。困難があっても「雨降って地固まる」の様相。
ｃ点 … ＳＳが興隆期から高原期に移行する時点。ＳＳの骨格･肉体的成長の完成をみる。版図の拡大停止など。
ｄ点 … ＳＳ高原期の中点。高原期を質的に二分する事跡，一時的な厄年的混乱などの形で現れる。

☆ この頃、後継ＳＳが‘懐妊’し、ＳＳの中で発育を始める（＝ｐ点）。

ｅ点 … ＳＳが高原期から衰退期に移行する時点。偉大な指導者の死，地方における反乱多発など。
ｆ点 … ＳＳの衰退加速点。中央政権の支配力失墜，反乱の全国化など。「雨降って崖崩れる」の様相。
ｇ点 … ＳＳが崩壊し、死亡を迎える時点。破壊革命，敗戦亡国，内乱勃発，中央政権の完全な形骸化など。

２．文明法則史学の研究方法

文明法則史学の研究方法の基本は「帰納的な文献研究」である。

帰納的に得られた結論が既知の成果と「結果として一致」することはあっても、恣意的なデータ収集等により既存のモデルに適合する結論を誘導するような手法はとらない。

2-1. ＳＳの研究法

1) 対象地域･時代の通説を主要資料として、テーマ史･統計等を補助資料として読み込む。
2) 一枚の年表に、政治･経済･軍事･社会心理･文化など各分野ごとの事跡を展開する。その際、事跡の抽出が恣意的にならないよう留意する。
3) 作成した分野別年表から社会のagingをつかむ。
4) 他のＳＳを参照しながら各指標点を決定する。通常、候補となる複数の事跡について比較し、指標点として最適なものを選ぶ。
5) 得られた結果を図に展開する。

2-2. ＳＳの認定基準

次の三段階すべてが明らかにされた場合に限り、ＳＳの実在を認定する。

1) 対象とする地域･時代が、周囲に独立し、前後に断層をもつ、社会的に均質な一つの塊であること。
2) 1)の塊が興隆→高原→衰退という一連の盛衰パターンをもつこと。
3) 2)の盛衰が社会心理の展開(少年型→青年型→壮年型→老年型)を反映したものであること。

※ 上記の認定基準に照らして十分な根拠を示し得ない場合、準ＳＳとして認定する場合がある。

2-3. ＣＣの研究法

1) 明らかになったＳＳを地域別･時間順に展開する。
2) ＳＳどうしを相互に比較し、各ＳＳの個性を明らかにする。
   p.3,②に付記されている諸事象が比較の際に主要な観点となる。
3) ＳＳ群の時間的展開に注目し、地域･時代を超えた共通性を探り、ＳＳを超えたレベルの盛衰パターンを明らかにする。

2-4. ＳＳの研究事例 （p. 8, ⑦, p. 9, ⑧, p. 12, ⑨参照）

ＳＳの姿が明らかにされた過程について、西アジアの**イスラム帝国ＳＳ**（p. 16, ⑪参照）を例にとって、その概略を示す。イスラム史は多くの受験生が苦手とする箇所であるが、この社会がＳＳを成していることを理解すると、全体像や流れの把握が容易になる。

2-4-1. 社会的に均質な地域･時代

7～13世紀の西アジア社会を時間的に眺めてみると、その前にはササン朝が支配する社会が、後にはモンゴル人が支配する社会があり、この社会が前後に明瞭な断層をもつことが分かる。次に空間的に眺めてみると、同じイスラム世界でもエジプト以西は異質な歴史を辿っており、アッバース朝カリフを権威とする秩序が保持される範囲は東方イスラム世界に限られていることが分かる。以上より、社会的な均質性をもつのは7～13世紀の東方イスラム世界（以下これを**イスラム帝国**とよぶ）だと結論できる。

2-4-2. 社会の盛衰

東方イスラム世界の分野別年表をp. 8, ⑦に示す。この年表から盛衰を掴む上で最も重要なのはイラン系地方王朝の位置づけだ。諸文献はこの点に関して「9～11世紀の西アジアの人々にとってアッバース朝領と地方王朝領の境界は意識的･実態的に無きが如しであった」旨を記述している。すなわち、イラン系地方王朝は巨大なイスラム帝国の一部をなしていた訳だ。こうした点や社会の安定度･商業の活力･学問の創造力とを併せて考えると、イスラム帝国社会の最盛期は10～11世紀にあったと結論できる。

そこで10～11世紀に注目すると、ブワイフ朝による中央の実権掌握、セルジューク朝の極盛期を下支えした有能なイラン人宰相の存在、ペルシャ散文文学の隆盛、学界におけるイラン人の活躍が目にとまる。つまり、イスラム帝国社会の最盛期を担った主役はイラン人であり、帝国社会の盛衰を探る際にイラン人の動向は無視できないことが分かる。

この点に気づけば、9世紀における“アッバース朝の衰退とイスラム世界の分裂”が、イスラム帝国社会の骨格形成を担ったアラブ人から帝国社会の最盛期を担うべきイラン人へのバトンタッチを意味することを容易に理解できる。また、イラン人の自主的･漸進的イスラム改宗が最盛期における彼らの活躍への足がかりとなった点、文治主義への転換が商業の大発達をもたらした点、外国語文献の翻訳推進が学問創造の土壌となった点などから、9世紀のイスラム帝国社会は明らかに興隆加速期にあったと結論できる。

以上、イスラム帝国社会は10～11世紀を最盛期とする盛衰をもっていたと結論できる。

2-4-3. 社会のエージング

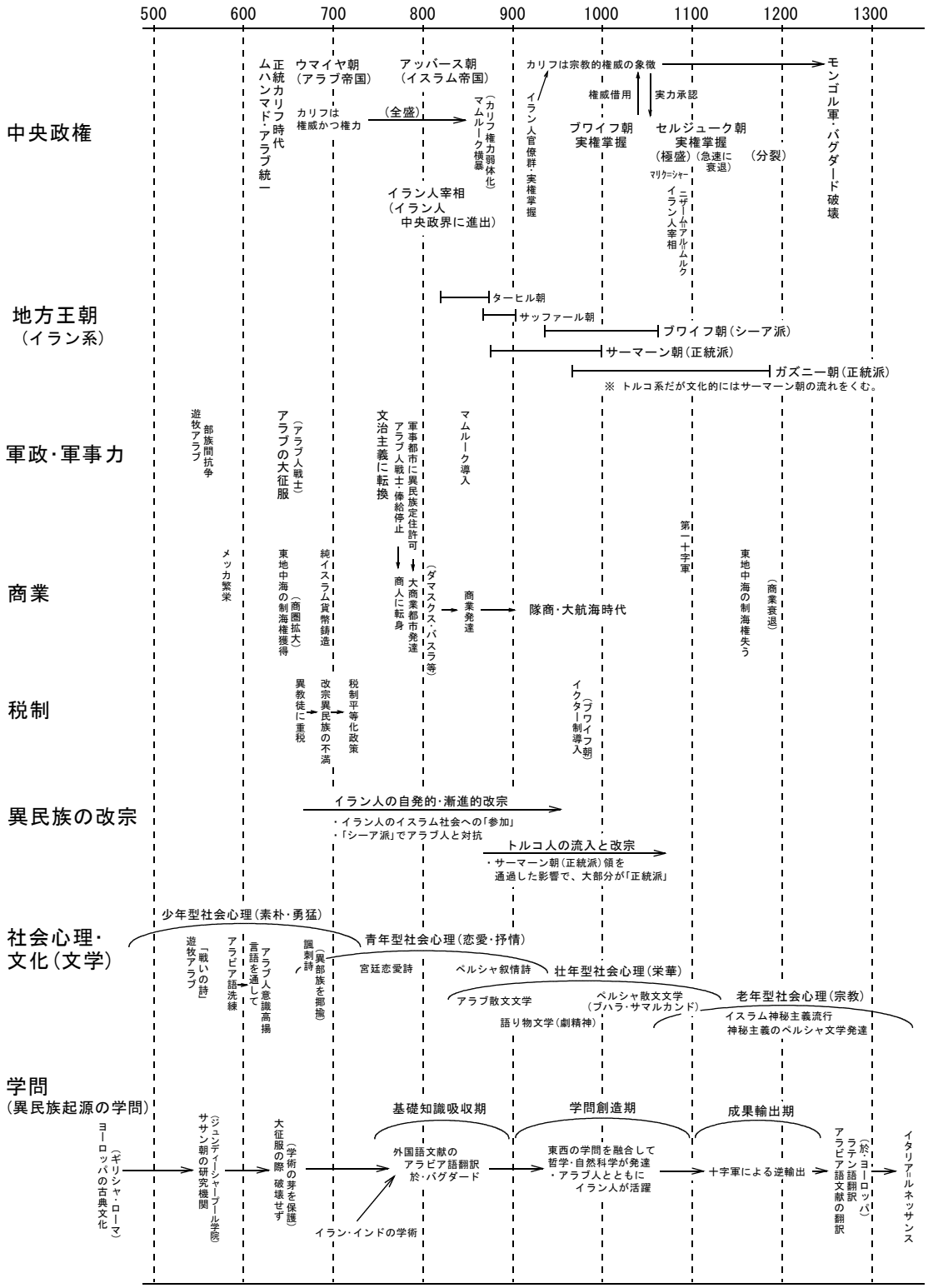
イスラム帝国社会の各期には社会心理を反映した文化が明瞭に現れている（→⑦）。こうした文化型の展開から、2-4-2の盛衰が社会のエージングを反映したものであるといえ、イスラム帝国社会はＳＳを成していたと結論できる。

以上および2-4-4の考察をもとに作成したＳＳ図がp. 9, ⑧である。このＳＳの特徴は、アラブ人→イラン人→トルコ人という三民族のバトンタッチによって成立した点にある。

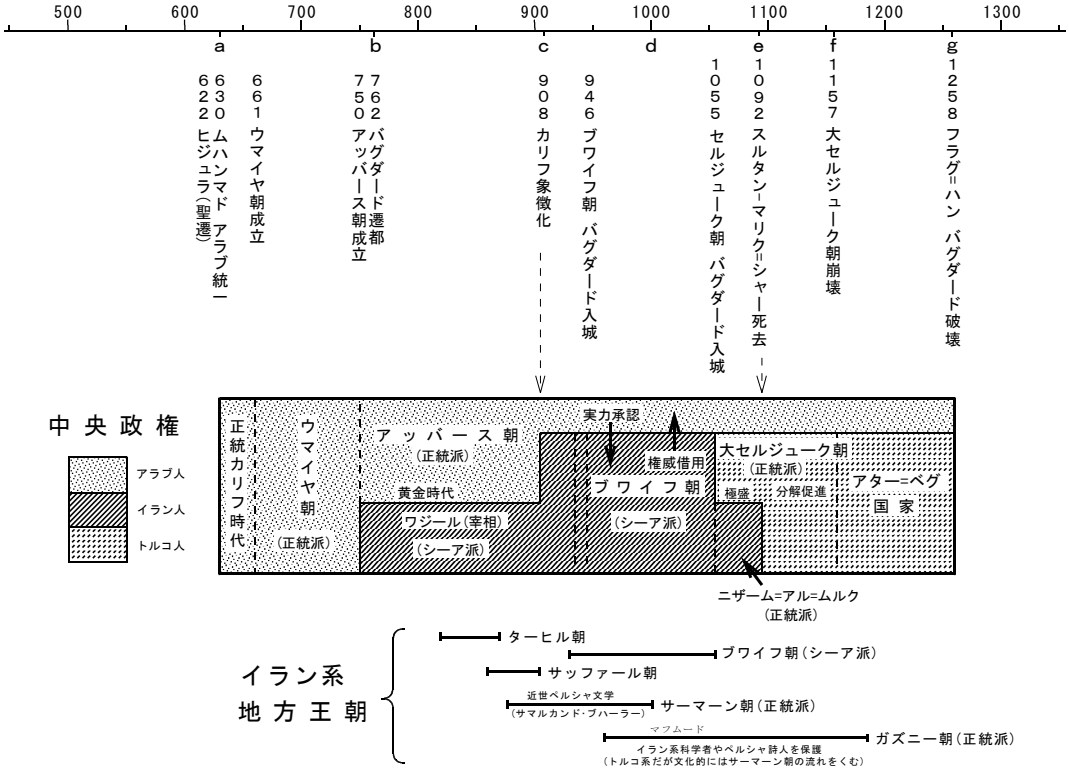
☆ ＳＳの姿を探る際、中央政権だけでなく社会全体に注意を払う必要のあることを理解できよう。なお、他のＳＳも同様の手続を経て初めてその実在が認定されている。

⑦ ＳＳの研究事例：イスラム帝国ＳＳ(1)

～ 東方イスラム世界（マシュリク）の分野別年表 ～

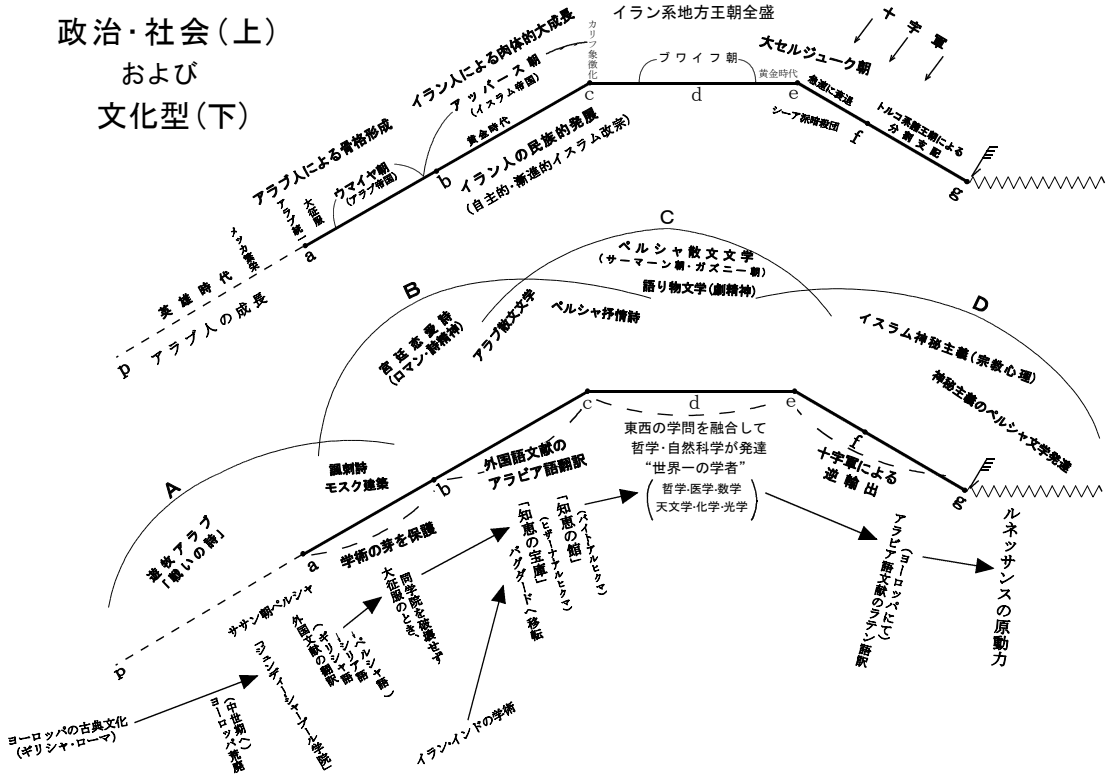


⑧ ＳＳの研究事例:　イスラム帝国ＳＳ(2)



イスラム帝国ＳＳの

政治・社会(上)
および
文化型(下)



2-4-4.各指標点の選定

ＳＳの実在が証明されたので、つづいて各指標点の選定に移る。

a点とg点

イスラム帝国ＳＳはアラブ人カリフを社会的統合の中心(後には宗教的統合の象徴)とする社会であった。アラブ人による秩序が**ムハンマドのメッカ征服(630年)**をもって成立したことは明らかなので、まずこれを**a点**に選定する。

アッバース朝カリフは9世紀頃から次第に実権を失っていくが、イラン系地方王朝･ブワイフ朝･セルジューク朝などはいずれもカリフの宗教的権威を承認しており、カリフはその後も西アジアにおける宗教的統合の象徴としての地位を保った。そこで「カリフがその地位を失った時点をg点とする」という方針で臨むと、モンゴル軍によってカリフ位そのものが失われた事跡が目にとまる。よって、**モンゴル軍によるバグダード破壊(1258年)**を**g点**に選定する。

イスラム帝国ＳＳに至るp点

ササン朝ペルシャが勢力を誇っていた頃、その辺境･アラビア半島において、アラビア語の共有による民族的一体感醸成やメッカの商業的繁栄など、アラブ人の民族的成長を示す現象がみられる。その延長線上にムハンマドによるa点が成ったことは明らかなので、**アラブ人の民族的成長開始(5世紀頃)**を**p点**に選定する。

c点とe点

西アジア社会が概ね10～11世紀に最盛期を迎え、その主役がイラン人だったことは既に指摘した通りである。したがって、イラン人が中央政権を実質的に掌握した様子からＳＳ高原期の始めと終わりを探り、それらが他の諸事象と矛盾しなければ、そのままc点とｅ点に選定する方針で臨むことにする。

まず、e点から探ってみよう。イラン人の後退というと真っ先に「セルジューク朝のバグダード入城」が目にとまるが、社会は以後も有能なイラン人宰相(ニザーム=アル=ムルク)のもとで極盛を誇っており、とてもＳＳが衰退期に入ったとは認められない。ところが、スルタン-マリク=シャーとニザーム=アル=ムルクの二人が死去した1092年以後は、目立った活躍をするトルコ人スルタンもイラン人宰相も現れず、「セルジューク朝は急速に衰退」する。「社会の衰退開始」「イラン人の後退」いずれをとってみても、この1092年がe点として最適といえる。

c点は「イラン人が中央政権を掌握した時点」を見つければよい。そこで、アッバース朝成立後のカリフ(アラブ人)と宰相･官僚群(イラン人)の力関係を追跡していくと、実権を握っていた最後のカリフはムクタフィー(在位902～908年)たったことが分かる。つまり、彼の退位をもってカリフは最高権力者から宗教的権威の象徴に移行した訳である。

ここで、カリフ象徴化(908年)やマリク=シャーの死去(1092年)がＳＳ高原期の開始や終了を示す点として適当かどうか他の諸事象と照らし合わせてみると、それらを強力に否定する事象は認められない。すなわち両者は指標点として適当といえるので、**カリフ象徴化(908年)**を**c点**に、**マリク=シャーの死去(1092年)**を**e点**に、それぞれ選定する。

b点

このＳＳの場合、高原期(c点～e点)を物語る主要な内容として「政治や文化におけるイラン人の活躍」「活発な商業活動(隊商・大航海)」「学問の創造(主に自然科学・哲学)」があり、これらを生む土壌となった「イラン人の自主的・漸進的イスラム改宗」「商業の大発達」「外国語文献の翻訳推進」などはＳＳの興隆加速現象としての意味をもつ。したがって、b点にはこうした土壌が培われる契機となった事跡を選べば良い。

まず、イラン人のイスラム改宗はアッバース朝が成立してイラン人が中央政界へ進出するのと歩調を同じくして進行した。また、商業の大発達や外国語文献の翻訳推進は、アッバース朝が文治主義へ路線を転換したことによって実現した。

このように、概ね、ウマイヤ朝からアッバース朝への移行が興隆加速点となっていることが分かる。そこでこの辺りの歴史を細かく検討してみると、アッバース朝成立後しばらくの間は社会的にやや不安定であり、社会の発展が本格化したのは第2代カリフ-マンスール(在位754～775年)の世であった様子が浮かんでくる。そして、新都バグダードの造営は、伸びゆく「イスラム帝国」の政治・文化の舞台を整備したという点において、彼の業績の中でもとりわけ大きな意味を持つ。よって、**バグダード遷都(762年)**を**b点**に選定する。

d点

このＳＳの場合、ＳＳ高原期を明瞭に二分する事跡は見あたらない。せいぜい、ＳＳ後半の主役を担うトルコ人による地方王朝・ガズニー朝の台頭をあげられる程度である。よって、一応、トルコ人によるイラン東部の支配権確立を意味する**サーマーン朝滅亡(999年)**を**d点**に選定しておく。（このように、d点がＳＳの中で大きな意味をもたない例は多い。）

f点

トルコ人による支配が続くＳＳ衰退期は、大セルジューク朝による政治的統一が一応保たれている時期と、政治的に分裂している時期とに大きく二分される。衰退加速点としては、両期の境界にあたる**大セルジューク朝崩壊(1157年)**が最適と考えられるので、これを**f点**に選定する。ただし、他の指標点に比べると選定根拠は最も弱い。

後続ＳＳのp点

イスラム帝国ＳＳが崩壊した後の西アジアは、モンゴル人による支配の時代を経て、**オスマン=トルコ帝国ＳＳ(1361～1918年)**の時代に移る。オスマン帝国の成立を可能にしたのは、11世紀中葉までビザンティン帝国の領土(＝キリスト教文化圏)であったアナトリア(小アジア)への、ムスリム(イスラム教徒)トルコ人の流入と定着であった。したがって、**トルコ人の民族的成長…とりわけトルコ人のアナトリアへの流入と定着の開始(11世紀頃)**を次なる**p点**に選定する。

☆ 以上、概略のみを記してきたが、他のＳＳの指標点も同様の手続を経て決定される。
判定が微妙な場合は、類例が他のＳＳにないか探し、互いに整合性をもつよう留意して決定を行う。

2-5. ＣＣの研究事例

次に、2-4で概説した**イスラム帝国ＳＳ**を 同時期の日本 および 800年前のヨーロッパと比較することにより、3つのＳＳとＣＣとの関連を探ってみよう。

3つのＳＳを下図(⑨)のように展開すると、様々な共通点が浮かび上がってくる。

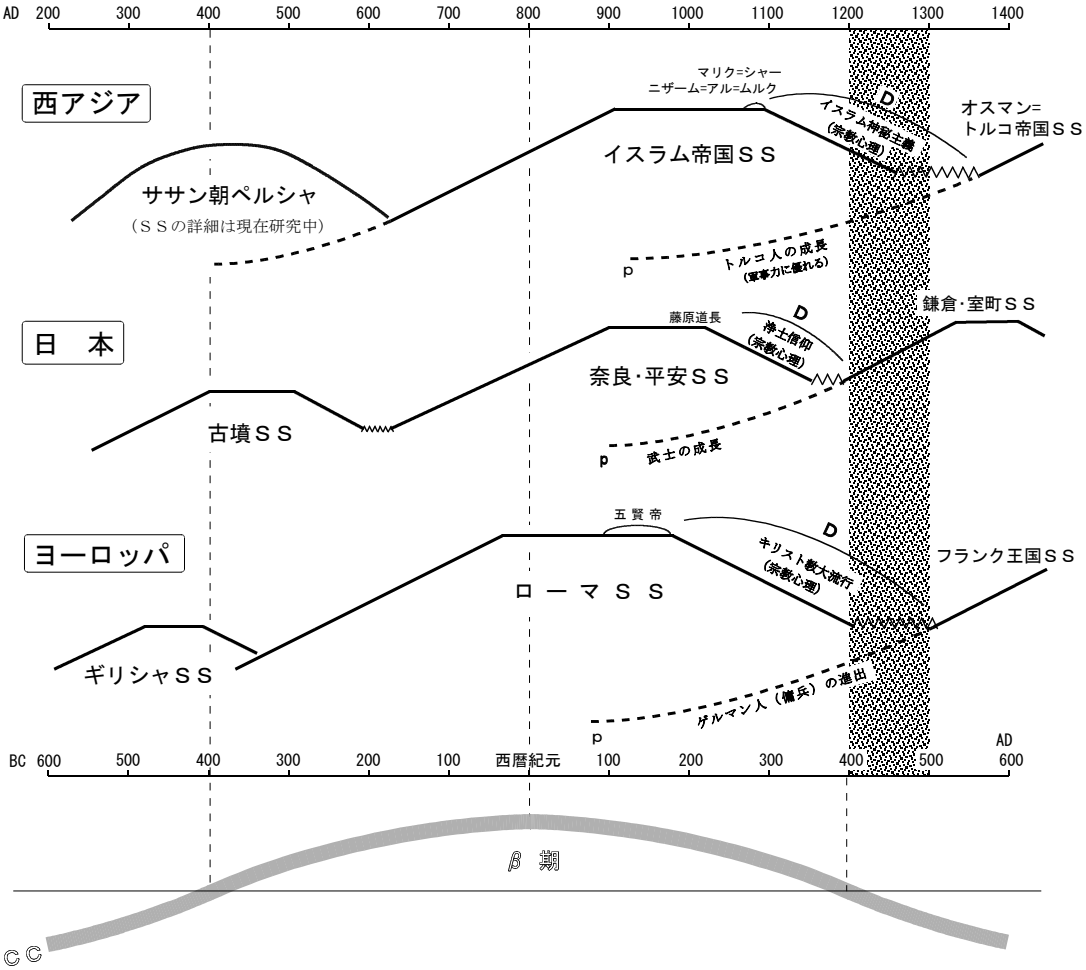
1) 先行するＳＳがかなり前倒しで登場している。
2) 寿命が長い(いずれも500年以上)。
3) ＳＳ高原期の終わりに、当該ＳＳの極盛を体現する人物(人物群)が登場している。
4) ＳＳ高原期の中頃に、次のＳＳを担う軍事勢力が辺境の地で登場している。
5) ＳＳ衰退期に宗教的社会心理を反映したＤ型文化が登場している。

こうした共通性は、ＣＣのもつ以下の法則性を補強する。

1) 西アジア･日本･ヨーロッパの各ＣＣはたいへん類似した展開パターンをもつ。
2) 西アジアのＣＣと日本のＣＣは互いに同位相の関係にある。
3) 西アジアおよび日本のＣＣに対してヨーロッパのＣＣは逆位相の関係にある。

☆ このような知見の蓄積により、ＣＣの法則性がより確かになっていく訳である。

⑨ ＣＣの研究事例（イスラム帝国ＳＳ,奈良･平安ＳＳ,ローマＳＳの相互比較）



３．文明法則史学の研究状況

以下、文明法則史学の現段階における研究進捗状況…どの地域･どの時代についてどの程度明らかにしてきたか…を示す。いずれの研究成果も、2-1～2-3に示した方法に則り、2-4,2-5と同様の手続を経て明らかにされてきたものである。

3-1. ＣＣの研究状況

ＣＣは村山の初期の研究によってその骨格の大部分が明らかにされた。その成果がp. 14,15⑩に示した「世界文明総図」である。

以後は、主にＳＳレベルの詳細な研究によって、ＣＣの法則性に対して肉づけが進められてきたといってよい。ＳＳレベルの研究が進んでＣＣと明確な矛盾を生じた例は、今のところ見あたらない。

3-2. ＳＳの研究状況

ＳＳレベルの詳細な研究を既に終えている地域･時代はp. 16⑪に示した通りである(1998年2月現在)。これらは研究経緯によって次の二つに分類できる。

3-2-1. 村山節･林英臣による研究･検証

概ね1990年頃までに、村山が研究し、林が検証･追研究を加えたＳＳについては既に複数の書籍にて発表されている(p. 21参照)。ただし、いずれもＳＳの姿を年代順に詳説する形をとっており、ＳＳの実在を実証するプロセスに関して2-4のような形で提示することは行っていない。

村山･林によるＳＳ

ヨーロッパ(ギリシャ,ローマ,近世以後,米合衆国) ・ 中国 ・ 日本

3-2-2. 最近の研究

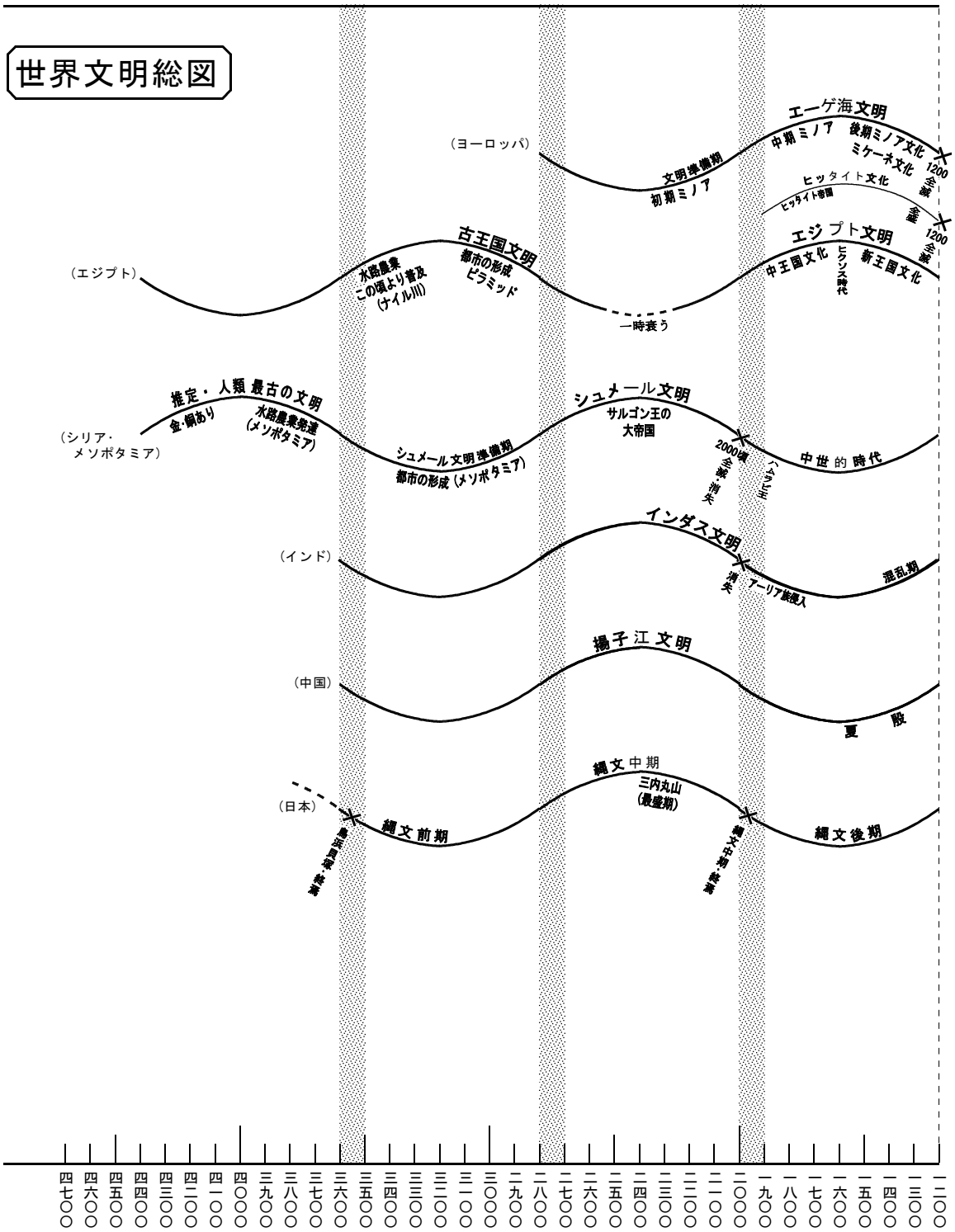
1996年5月、ＳＳレベルの研究が未着手の地域･時代の研究を推進する必要性を認める若手有志によって組織的なＳＳ研究が始まった(現･**文明法則史学研究所**; p. 22参照)。同グループはＳＳ実在の実証に留意した論文構成をとっており、その研究成果は同所の研究誌『**史学維新**』にて発表されている(現在･第2巻まで発行)。

文明法則史学研究所研究員によるＳＳ

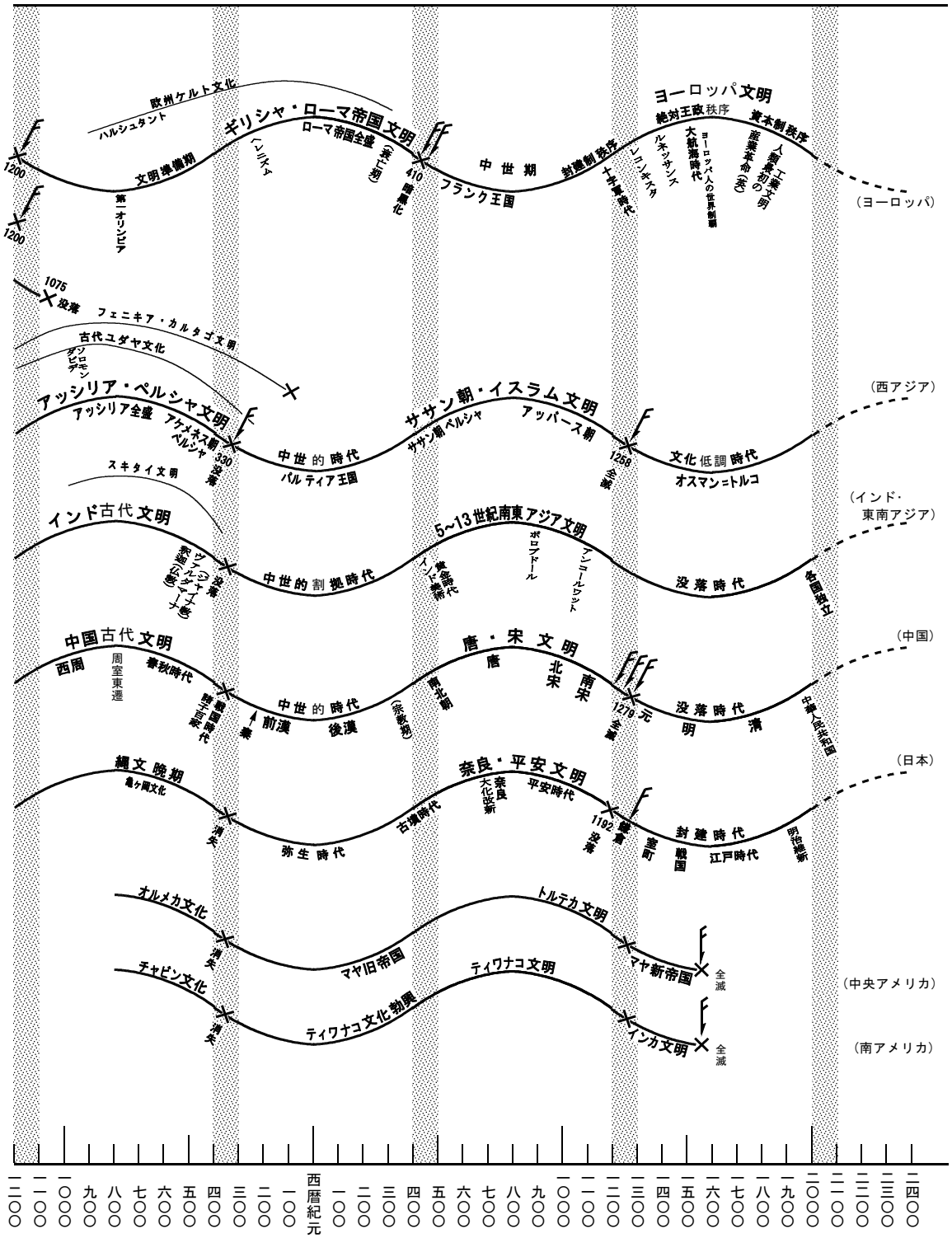
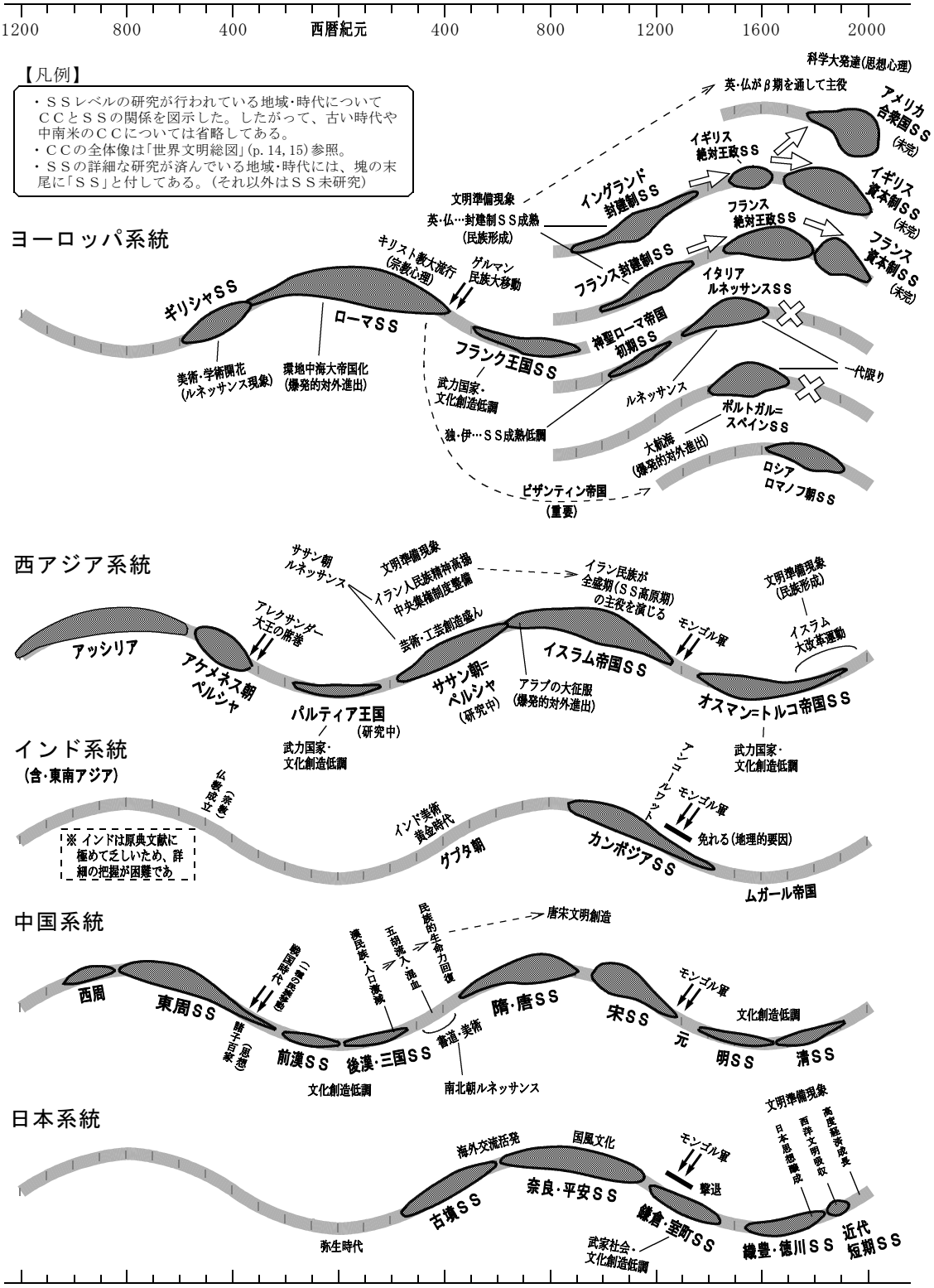
ヨーロッパ(フランク王国ＳＳ,英仏各封建制ＳＳ) ・ 西アジア(イスラム帝国ＳＳ,オスマン=トルコ帝国ＳＳ) ・ インド=東南アジア(カンボジア)

⑩ ＣＣの研究状況（1998. 9. 現在）

村山節著『波動進化する世界文明』(博進堂)を基本に、林英臣･浦崎太郎が一部加筆･修正して作図した。



※ このページのＣＣ上で展開したＳＳの位置を p. 16 ⑪ に示した。



⑪ ＳＳの研究状況（1998. 9. 現在）